

おいしいペラシダ。2 特設ページ限定特典

番外編 まもり、ラーメンは味噌が好き。

キッチンのヤカンが、ビービー鳴きはじめた。
むしろ泣きたいのはこっちだ。まもりは段ボールを開ける手を止め、立ち上がった。

「ほっ」

たかが数メートルの移動だが、大きめの段ボールやゴミ袋の上を、またいで進む。なんとか火元になどつくこと、用意してあったカップ麺に湯をそそいだ。（これ、寝るまでに片付け終わるかなあ……）

カウンター越しに広がる惨状に、苦笑しか出てこない。

大学に合格し、従姉妹の住んでいた練馬のマンションに越してきたのが、三月の最終日。つい昨日のことだ。大型の家具や家電は涼子が残っていたけれど、持ち込む私物などわずかなものとたかをくくっていたが、いざまとめて運び込めばけっこうな量だった。

何より、明日の入学式に使うバンプスが、どこかに紛れて行方不明というのがまずい。おかげでまもりは、さっきから血眼になって段ボールを漁る鬼と化していた。

（入れ忘れたってことはないと思うんだけど……）

このまま見つからなかったら、池袋のマリイにでも駆け込んで、新しい靴を調達しなければならぬ。閉店の時刻を考えれば、まもりに残された時間はそう多くない。どうしたって焦ってしまう。

「そもそも買い直す予算なんてないよう。あーもう、お願いだから出てきてー」

——ピンポン。

表でインターホンが鳴る音。

（宅配便屋さんかな？）

自宅から持ち込んだ荷物に加えて、新しく通販で注文したシャツや衣袋、ケースなどが、届くはずだった。

まもりは玄関へ向かうとし——未使用のゴミ袋に足をとられた。
ズダン！ と前のめりに転倒する。積み上げてあった開封済み段ボールが

雪崩を打つ。

「ちよっ、待って宅配便の人——」

まもりがもがいている間も、インターホンは鳴り続け、なんとか起き上がってモニターの受話器を取ったら、すでに人の気配はなかった。

慌てて表へ出る。

段ボールをカートに乗せたお兄さんは、エレベーターに引き返そうとしていた。

「すいません！ いいます！ 留守じゃないです！」

大騒ぎで荷物を引き渡してもらい、はんこを押して帰ってもらった。

ドアの前に段ボールを積み上げ、春先だということと汗が出た。

前髪を持ち上げていたターバンを外し、「息ついていると、目の前を人が横切り、隣の家のドアを開けはじめた。

メンズのファッション誌からそのまま出てきたような、モード系の細身のスーツを着込んだ、背の高い男だった。

まもりがぼかんとしていると、向こうもこちらを見た。

「……新しい入居の方ですか？」

自分に言っているのだと、一拍遅れて理解した。

「そう、そうです！ わたし、栗坂まもりです」

「栗坂」

「栗坂涼子の従姉妹です。今月から、わたしがかわりに住むことになりました。よろしくお願いします！」

その場で大きく「礼」と、向こうは切れ長の目を細め、ほんのくすかだが笑ったのだ。

「二号室の亜湯です。どうぞよろしく」

それからのことは、興奮しすぎてよく覚えていない。

受け取った荷物を家の中に運び込み、転んだ拍子に出てきた黒バンプスに狂喜乱舞し、お湯を入れたカップ麺の存在を思い出したのは、だいぶたってからのこと。

試しに一口食べてみたが、麺がでろでろに伸びきっていた。

「超——まずい！ でもでも、イケメンなお隣さんだった——」

栗坂まもり、まだ隣人の正体を知る前。春の話である。